

# 特集

## 2022年3月9日 関東支部会報告

### ～ 電視観望を知る～

松岡義一（一般普及分野／関東支部）

飯塚礼子（明星大学、日食情報センター）

#### 1. はじめに

新型コロナウイルス禍が始まってから2年が経つ。当初、各地で中止を余儀なくされていた天体観望会は、さまざまな感染防止の取り組みを行った上で、次第に再開されるようになってきた。しかし、従来のようにアイピースを気軽に覗いてもらう形式の観望会が復活するのかについては、まだ先は見えない。

また、本年2022年11月8日には皆既月食＋天王星食という一大イベントが控えている。こうした天文現象に合わせて観望会を実施するには、参加者がその瞬間を共有する手法を考える必要がある。

このような課題を考えると、「電視観望」というキーワードが浮かぶ。昨今、天文愛好者の界限では、光害の問題を乗り越えることができる「電視観望」が急速に普及している。そのポテンシャルは高く、教育や普及への応用が望まれるとともに、まさに観望会が直面する課題克服の一助にもなるはずである。

そこで今回の関東支部会はテーマを「電視観望を知る」とし、最新の情報を共有するとともに、さらなる活用への後押しを図ることを目的とした。

#### 2. 基調講演について

対面での支部会の開催が待ち遠しいかぎりではあるが、今回もオンライン（Zoom）による開催とした。オンライン開催のメリットは、講演者の在所を問わないことである。そこで、電視観望の先導者「Sam」氏として知られ、第一線の天文研究者でもいらっしゃる宮川治さんと、eVscopeハンドブックを制作され、

天文月報に報告記事を投稿された渡部義弥さん、電視観望についての論文を複数発表されている千代西尾祐司さんの3名をお願いをした。

なお、渡部さんには企画の初期段階でご助言をいただき、竹内幹蔵さん（島根県立三瓶自然館サヒメル）には論文の主著者である千代西尾さんをご紹介いただいた。

#### 3. プログラム

今回は、基調講演のみとし、以下の順で講演をお願いした。

##### (1) 「電視観望の普及」

宮川 治（東京大学宇宙線研究所）  
メインゲストとして宮川治さんに60分弱のお話をいただいた。宮川さんは富山からのご出演であり、当日は天候が良かったので、電視観望の実演がなされ、機材操作や処理のテクニックの一端をご披露いただくことができた。チャットでも多くの質問が寄せられ、ていねいに直接ご回答をいただいた。

##### (2) 「電視観望望遠鏡 eVscope の衝撃」

渡部義弥（大阪市立科学館）  
渡部さんには15分ほどのお話をいただいた。渡部さんも地元（市街地）から登壇していただき、eVscopeの特徴（特長）や組み立てのようす、操作画面の紹介などを伺った。

##### (3) 「天文に詳しくなくても観望会は開けるか」

千代西尾祐司（公立鳥取環境大学）  
千代西尾さんにも15分ほどのお話をいた

だった。千代西尾さんも地元からの出演で、ご自身の取り組みを紹介していただき、やはり最後はリアルタイム処理のご紹介をしてくださった。

それぞれの内容については、本号に原稿をお寄せくださっているの、そちらをご覧ください。

当日の進行は松岡が担当した。そのなかで、発売直後の月刊『星ナビ』2022年4月号に電視観望について8ページにわたる記事を執筆された村上将之さんからコメントをいただいた。

22時過ぎに終了後、そのまま交流会を実施した。冒頭で、鈴木文二さん（渋谷教育学園幕張中・高）と藤井大地さん（平塚市博物館）からネットワークカメラ「ATOM Cam」の活用についての「予告篇」をお話いただいた。広義の「電視」ではあるものの「観望」からは離れてしまうため、話の流れが切れてしまったことに反省の念が残る。本件は、別途、有志で継続して取り組んでいきたいと考えている。

交流会は日付が変わってからも続き、とくに宮川さんには長時間お付き合いをいただいたことを申し添えたい。

#### 4. おわりに

今回も、会の内外から多くの方に申し込みをいただいた。Zoomの同時参加者数は最大で110人に迫り、出入りがあったので、実際の参加者はもう少し多かったと思われる（年

会に次ぐ規模となったようである）。電視観望とオンラインは親和性が高く、今回はオンライン開催のメリットを活かすことができた支部会であったといえるだろう。開催日程が水曜日の20時開始となり、時間的な余裕がなかったのは心残りではあるものの、ご参加くださった方々が得るものは大きかったのではないだろうか。

なお、宮川さんは月刊『天文ガイド』2022年6～7月号に、渡部さんは月刊『星ナビ』2022年6月号に、それぞれ電視観望について寄稿されているので、あわせてご一読をお勧めしたい。

最後に、ご登壇いただいた方々と、ご参加・ご協力いただいた方々に、あらためて感謝を申し上げます。



松岡 義一

飯塚 礼子